

インテグラル思想研究会
 インテグラル・スピリチュアリティ (Part Two)
 鈴木 規夫 Ph. D. (Norio001@nifty.com)
 2006年9月23日 (土曜日)

今回も、前回にひきつづいて、ケン・ウィルバーの最新作である *Integral Spirituality: A startling new role for religion in the modern and postmodern world* において展開されている議論を参照しながら、現代において必要とされる Vision Logic (インテグラル) 段階の意識構造を基盤とするスピリチュアリティ——「インテグラル・スピリチュアリティ」——とはいかなるものであるのかを探求したい。

インテグラル・スピリチュアリティの諸条件

神の3形態 (3 Faces of God)

人間の神秘体験において、体験者の視野に「神」は3つの形態で立ちあらわれる。

❖ 一人称 (First Person ・ “I AM”)

Spirit in 1st-person is the great I, the I-I, the Mahatma, the Overmind—Spirit as that great Witness in you, the I-I of this and every moment. The very Witness *in which* this page is arising, and this room, and this universe, this Witness or I-I in you is Spirit in its 1st-person mode (Wilber, 2006, p. 190).

❖ 二人称 (Second Person ・ “Thou”)

Spirit in 2nd-person is the great You, the great Thou, the radiant, living, all-giving God before whom I must surrender in love and devotion and sacrifice and release. In the face of Spirit in 2nd-person, in the face of the God who is All Love, I can have only one response: to find God in this moment, I must love until it hurts, love to infinity, love until there is no me left anywhere, only this radiant living Thou who bestows all glory, all goods, all knowledge, all grace, and forgives me deeply for my own manifestation, which inherently brings suffering to others, but which the loving God of the Thou-ness of this moment can and does release, forgive, heal, and make whole, but only if I can surrender in the core of my being, surrender the self-contraction through love and devotion and care and consciousness, surrender to the great Thou, as God or Goddess, but here and now, radiant and always, this something-that-is-always-greater-than-me, and which discloses the depths of this moment that are beyond the I and me and mine, beyond the self altogether, and given to me by the Thou-ness of this moment, but only if I can deeply and radically surrender in love and devotion to the Great-Thou dimension of this now. This Great God/dess that *faces me* right now, that is *talking to me* right now, that is *revealing* Him/Herself to me as a communion with Thou in a sacred we, is Spirit in its 2nd-person mode (Wilber, 2006, p. 190).

❖ 三人称 (Third Person ・ “Web of Life”)

Spirit in 3rd-person is the Great It, or Great System, or Great Web of Life, the Great Perfection of existence itself, the Is-Ness, the Thus-ness, the very Such-ness of this and every moment. Spirit arises in its 3rd-person mode as this vast impersonal evolutionary System, the great Interlocking Order, the Great Hierarchy of Being, of interconnected planes and levels and spheres and orders, stretching from dust to Deity, from dirt to Divinity, but all nonetheless in the Great Perfection of the unfolding suchness of this moment, and this moment, and this. All of those conceptions are 3rd-person conceptions, or Spirit in its 3rd-person mode (Wilber, 2006, p. 190).

これは、人間の認識の基本形態である“Big Three” (“I” ・ “We” ・ “It/Its”) が神秘体験においても立ちあらわれることを指摘するものである。インテグラル・スピリチュアリティは、実践活動において上記の視野がそれぞれ独自の重要性を有することを認識したうえで、スピリチュアリティの具体的な実践の特徴を把握しようとする。こうした基準は、今日、世界的な規模で展開している多様な宗教運動の性格を把握するうえで、貴重な洞察を提供してくれるだろう。

例えば、第二次世界大戦後の先進国（とりわけ、合衆国）におけるスピリチュアリティのありかたの変遷を理解するうえで、とりわけ注目すべきことは、神の存在場所の外部から内部への移行であろう。具体的な実践の領域においては、積極的な東洋宗教の導入と実践に象徴されるように、集合的規模で、神は、二人称的な存在としてではなく、一人称的な存在として探求・体験されることになる。もちろん、こうした「重心の移行」は、集合意識の発達段階の重心が、神話的合理性段階から合理性段階への移動という、歴史的動向と連動して展開したものであることはいままでのまではない。そこでは、信仰の拠り所が外的権威（教会）から内的権威（合理的思考）へと移行することになったのである。また、「個」の自律性を重視する合理性を基盤としたスピリチュアリティは、必然的に、一切の外的な干渉を排除した閉鎖的領域 (“privacy”) において、「神秘体験」を介して、絶対者との直截的な関係を追及する「体験主義」 (“experientialism”) として結実することになる。第二次世界大戦後の合衆国における東洋の伝統思想の積極的な受容は、こうした土壌の上に可能となったのである。

しかし、ウィルバーの指摘するように、ここでひとつの重大な混乱がひき起こされることになる。神話的合理性段階から合理性段階への成長という垂直的な進化がスピリチュアリティの二人称的なありかたから一人称的なありかたへの移行に象徴されるものとして理解されたことの結果、下記のような誤解が蔓延することになったのである。ウィルバーは、これを「段階と領域の混同」 (“Level-Line Fallacy”) と形容している。

- ❖ 一人称 = 合理性段階
- ❖ 二人称 = 神話的合理性段階

しかし、実際には、意識の各発達段階は、一人称・二人称・三人称という3種類のスピリチュアリティを实践する能力を内包している。その意味では、今日、世界的に展開している上記の傾向は、必ずしも必然のものではないのである。

今日、スピリチュアリティを巡る人類の課題として、とりわけ重要になるものとして、少なくとも下記の2つが挙げられるだろう。

- ❖ 神話的合理性段階（もしくは、それ以前の発達段階）にその重心を固着している二人称のスピリチュアリティをいかにして合理性段階にひきあげるかという課題（具体的には、原理主義的な宗教の興隆の問題）
- ❖ 合理性段階～前期 VL 段階にその重心を固着している一人称のスピリチュアリティをいかにして VL 段階にひきあげるかという課題（具体的には、体験主義的な宗教の諸問題——例：“Spiritual Materialism”や“Boomeritis”に代表される自己中心性の肥大）（尚、この段階のスピリチュアリティは、しばしば、“Flatland Holism”と形容されるような、三人称的な営みとして顕在化することもある）

Andrew Cohen との対話においては、ウィルバーは、とりわけ、将来的にインテグラル・スピリチュアリティの担いてとなる可能性を潜在させている後者の克服すべき課題について詳細に言及している。そこでは、可能な限り外的な干渉を排除した閉鎖的領域において「神秘体験」を追及することを実践の基本的なありかたとすることが内包する諸問題を認識・克服することの重要性が強調されている。

一人称のスピリチュアリティが内包する構造的な盲点は、自己を放擲 (surrender) する対象 (他者) をもたないということである。一人称のスピリチュアリティにおける自己放擲の対象とは、あくまでも自己の深層に存在する機能や領域なのである (例えば、“Higher Self”等、人間性心理学やトランスパーソナル心理学の諸々の理論において強調される意識の機能や領域)。こうした実践形態はそれそのものとしては人間存在が内蔵する根源的な自己肯定の衝動を克服することはできない。むしろ、こうした実践形態は——それが二人称的要素を排除するかたちで展開する限りにおいて——個人の自己中心性を温存・増幅することにつながるといえるだろう。そこには、真の意味での自己否定をすることを回避することに起因する傲慢さが漂うことになるのである。

合衆国をはじめとする先進国における東洋宗教の受容のありかたが、それらの宗教の重要要素を看過したものに終始しているという指摘は、今日、それらの国々において大衆的に展開しているスピリチュアリティが、窮極的には、二人称の取り組みを排除した、限定的な視野にねざしたものであることの問題を照明するものである。そして、こうした問題は、スピリチュアリティの自己肯定と自己肥大の支援装置として商品化が完成した日本においても同様の深刻さをもって受けとめられるべきものである。その意味では、インテグラル・スピリ

チュアリティの確立のひとつの重要な課題は、二人称の要素をどのようにして復権するかということであるといえるだろう。

議論課題

二人称のスピリチュアリティを成熟させていくうえで、「師」 (“Guru”) との関係構築は必須の要素となるだろう (実際のところ、“Higher Self”等に象徴される意識の機能や領域は、自己の崩壊をもたらすほどに透徹した批判をあたえてくれることはまずないのではないだろうか?)。しかし、共同体において「師」としての役割を担い機能することは、長期的には、人間に克服困難な問題をつきつけることになる。そこでは、人間は不可避免的に自己肥大のダイナミクスにとられることになるのである (Lifton, 1999)。こうした状況を踏まえて:

- ❖ 果たしてわれわれはいかにして二人称の要素を復権するための具体的な方策をうつことができるのだろうか?
- ❖ もし個人という存在がこうした責任を担うために構造的な限界を宿しているならば、果たしてどのような三人称的な装置を構築することができるのだろうか?

影 (Shadow)

今日、心理学とスピリチュアリティの関係については多数の研究が蓄積されているが、そのなかでもとりわけ重要となるのが、「統合」 (integration) と「超越」 (transcendence) の相補的な価値を認識する研究の数々であろう。一般的に、心理学の責任領域は前者であると、そして、スピリチュアリティの責任領域は後者であるといわれている (もちろん、実際には、多くの場合においては、両者は同時に必要とされることになる)。そして、インテグラル・スピリチュアリティにおいては、これらの両方を統合的に活用 (実践) していくことの必要性が認識される。

ここでは、インテグラル・スピリチュアリティの確立という課題を探求するために、今日、スピリチュアリティにおいて深刻な問題として存在している「スピリチュアル・バイパス」 (“Spiritual Bypass”) の問題についてとりあげる。これは、パーソナル領域 (段階) の問題・課題との対峙を回避するためにスピリチュアリティの実践に取り組むことを意味する (実際、こうしたスピリチュアリティへの取り組みは非常に蔓延しており、例えば、合衆国において、長年、リトリートの指導をしてきたJack Kornfieldは、自己の体験にもとづき、参加者の80~90%は、まず、一般的な心理療法を体験する必要のある人達であったと述懐しているという)。もちろん、こうした取り組みをとおしても「変性意識状態」 (states) を醸成するための技能を修得することはできる。しかし、真の意味で統合されたスピリチュアリティを実践していくことができるためには、こうした逃避的な姿勢は、人格基盤の脆弱性 (“inauthenticity”) を温存することをお

して、諸々の深刻な問題の温床となることになる。

「影」(Shadow)とは、自己の抑圧(repressed)・放棄(disowned)された側面のことを意味する。その結果、それらの側面は「無意識」(unconscious)として、意識の境界下に追いやられて、そこで存在・活動することになる。ここで重要となるのは、人間は、無意識化することをおして、必ずしも、そうした側面から自由になることができるわけではないということである。むしろ、そうした過程を通じて、自己の側面を疎外することをおして、人間は、自己("I")そのものを貧困化するばかりでなく、自らを二人称化("You")・三人称化("It")された自己との緊張関係に置くことになるのである。自己から疎外された側面(例:怒り)は、他者に投影され、人間は、日常における他者との関係において、無意識化された自己と対峙することを強いられることになる。例えば、抑圧・放棄された怒りは、今度は、他者の怒りとして経験され、自己の内部には、そうした怒りに曝されることがもたらす恐怖が生じることになる。

こうした状況において、瞑想等を実践して、自己の内部に生じた恐怖を観想(対象化)することをおして、それと非同一化(disidentify)することは——たとえ一時的に恐怖にたいする耐性を強化してくれるとしても——疎外された自己の側面を再び自己の一部として統合するという根本的な解決策にはならない。むしろ、それは、疎外(抑圧と放棄)を強化することになる危険性を宿している。また、疎外された自己の側面は人格成長のために活用可能な「心的エネルギー」(Psychic Energy)の絶対量を減少させることになる。¹そして、そうした疎外が過度のものとなり、あまりに多量のエネルギーが「喪失」される時、人格の垂直的な成長そのものが不可能となる。

統合の作業とは、スピリチュアリティにおいて志向される対象化の作業(一人称→二人称→三人称)ではなく、一般的な心理療法において志向される統合の作業(三人称→二人称→一人称)であるといえる(この過程をフロイドは、“Where id was, there ego shall be”、もしくは、“Where it was, there I shall become”と形容している)。統合が必要とされる状況において、スピリチュアリティの実践という大儀のもと、対象化に取り組むことは、疎外を正当化することをおして、病理を深刻化(もしくは放置)することにつながる。

この場合、二人称化・三人称化された人格領域を再び自己のものとして所有するということは、それを内部(Zone #1: inside of UL)から経験するということがある。そうした体験をすることができたときに、人間は、はじめて健全なかたちで対象化の作業に着手することができるのである。ウィルバーの指摘するように、こうした経路をへて対象化された自己は、自己から疎外された三人称("It")ではなく、自己の構成要素としての三人称("Me")として経験されることを留意していただきたい(「所有権」の確立)。

3S

インテグラル・スピリチュアリティの重要課題のひとつは、3つのSを統合することとして理解することができるだろう。

- ❖ Shadow (影)
- ❖ States (意識状態)
- ❖ Stages (意識段階)

伝統的な神秘主義思想の問題点は、心理学が研究対象としてきた個人の内面領域——Zone #1 (inside of UL) と Zone #2 (outside of UL) ——にたいする詳細な洞察を欠いていることである。具体的には、Zone #2 (outside of UL) の洞察とは、人間の意識構造の発達の過程についての綿密な調査・研究にもとづいた洞察のことである (Stages)。そして、Zone #1 (inside of UL) の洞察とは、発達の過程において蓄積された病理にたいする洞察を基盤として、そこに存在する「影」を統合するための洞察のことである (Shadow)。とりわけ、“Wilber-Combs Matrix”の示唆するように、神秘体験といえども、そこには必ず認識主体としての自己が創造的に関ることになる。認識主体が内包する病理に無自覚であることは、それが必然的にもたらすことになる諸々の錯覚 (distortion) にたいして無防備であるということである。

伝統的な神秘主義思想の価値は、非日常的な意識状態 (States) を醸成するための方法確立することをおして、個人の内面領域——Zone #1 (inside of UL) ——をその境界領域まで開拓したことである。日常意識の限界を超越して、その神秘的な本質に覚醒することを可能としたのである。そして、これは、心理学がほぼ完全に見落としていた領域であると。

ただ、ここで留意すべきことは、こうした非日常的な意識状態を経験することは、必ずしも意識構造の垂直的成長を保証するものではないということである。確かに、非日常的な意識状態の経験は、既存の意識構造を対象化することを可能とする。結果として、こうした体験は意識構造の変容を促す契機としてはたらくことができるのである。しかし、実際に、そうした意識構造の変容が起こるためには、実践 (経験と解釈) を支える「世界観」 (“Framework”) が、それを促進するものであることが必要となる。²

上記のように、インテグラル思想は「2種類の悟り」 (“two kinds of enlightenment”) が存在することを認識する。

- ❖ 「垂直的悟り」 (“vertical enlightenment”) : 人類進化の現在の段階において構築可能な最高の意識構造 (Susanne Cook-Greuter の発達理論において “Unitive Stage” と形容されている段階) を確立して、その認識の枠組をとおして、人類に経験可能な領域を持続的に体験すること。
- ❖ 「水平的悟り」 (“horizontal enlightenment”) : 人類進化の現在の段階にお

いて構築可能な最高の意識構造（Susanne Cook-Greuter の発達理論において“Unitive Stage”と形容されている段階）を確立することなしに、人類に経験可能な領域を意識状態として持続的に体験すること。

真の意味で統合的な実践が前者を志向するものであることはいうまでもない。

参考資料

- 鈴木 規夫 (2006) ウェブサイト紹介 第四回 : What Is Enlightenment? : Redefining spirituality for an evolving world. Available at <http://www.integraljapan.net/articles/web4.htm>
- 鈴木 規夫 (2006) ウェブサイト紹介 第五回 : Spiral Dynamics. Available at <http://www.integraljapan.net/articles/web5.htm>
- 林 道義 (1999) 特別講義 ユングの心的エネルギー論 Available at <http://www007.upp.so-net.ne.jp/rindou/jung5-3.html>
- Andrew Cohen & Ken Wilber (2006). The Guru and the Pandit: Dialogue XIII—God’s playing a new game: Integral spirituality, evolutionary enlightenment, and the future of religion. In *What is enlightenment? : Redefining spirituality for an evolving world* (33, June-August 2006). pp. 66-95.
- Allan Combs (1995/2002). *The radiance of being: Understanding the grand integral vision; Living the integral life*. St. Paul, MN: Paragon House.
- Jorge N. Ferrer (2002). *Revisioning transpersonal theory: A participatory vision of human spirituality*. Albany: State University of New York Press.
- Robert Jay Lifton (1999). *Destroying the world to save it: Aum Shinrikyō, apocalyptic violence, and the new global terrorism*. NY: Henry Holt.
- Brad Reynolds (2004). *Embracing Reality: The integral vision of Ken Wilber*. NY: Jeremy P. Tarcher/Penguin.
- Bill Torbert and associates (2004). *Action inquiry: The secret of timely transforming leadership*. San Francisco: Berrett-Koehler Publishers.
- Ken Wilber (1983/2001). *Eye to eye: The quest for the new paradigm*. Boston: Shambhala.
- Ken Wilber (1995/2000). *Sex, ecology, spirituality: The spirit of evolution*. Boston: Shambhala.
- Ken Wilber (1997). *The eye of spirit: An integral vision for a world gone slightly mad*. Boston: Shambhala.
- Ken Wilber (1999). *One taste: The journals of Ken Wilber*. Boston: Shambhala.
- Ken Wilber (2000). *Integral psychology: Consciousness, spirit, psychology, therapy*. Boston: Shambhala.
- Ken Wilber (2001). *A theory of everything: An integral vision for business, politics, science, and spirituality*. Boston: Shambhala.
- Ken Wilber (2002). Introduction to excerpts from volume 2 of the Kosmos Trilogy. Available at <http://wilber.shambhala.com/>
- Ken Wilber (2002). Excerpt A: An integral age at the leading edge. Available at <http://wilber.shambhala.com/>
- Ken Wilber (2002). Excerpt B: The many ways we touch: Three principles helpful for any integrative approach. Available at <http://wilber.shambhala.com/>
- Ken Wilber (2002). Excerpt C: The ways we are in this together: Intersubjectivity and interobjectivity in the holonic Kosmos. Available at <http://wilber.shambhala.com/>
- Ken Wilber (2002). Excerpt D: The look of a feeling: The importance of post/structuralism. Available at <http://wilber.shambhala.com/>
- Ken Wilber (2006). *Integral spirituality: A startling new role for religion in the modern and postmodern world*. Boston: Shambhala.

¹ 「心的エネルギー」 (Psychic Energy) については、例えば、林 道義 (1999) を参照していただきたい。

² インテグラルな実践 (ITP、または、ILP) において、自己の思想的な世界観を鍛錬することが非常に重要視されるひとつの理由は、意識の構造的な成長を促進するうえで、それが非常に重要な責任を担うことにたいする認識があるということである。今日、国内・国外において展開している「こころの時代」を特徴づける姿勢として指摘される「反知性主義」や「感覚主義」(非日常的な意識状態を経験することを目的する態度。こうした態度が非日常的体験にたいする執着に支えられるものであるという意味においては、それは典型的な “Spiritual Materialism” としてとらえることができるだろう) は、その意味では、真の意味での意識成長 (意識構造の段階的成長) には、破壊的な影響をもつものとしてとらえることができるだろう。